



—湾岸・アラビア半島地域ニュース—

イエメン：治安情勢（サアダ州での武力衝突）（8月17-19日付現地紙取りまとめ）

1. イエメン政府軍とホーシー派武装勢力との戦闘がイエメン北部で拡大している。今回の武力衝突開始から6日目となる8月16日には、ホーシー派の重要軍事拠点ハルフ・ソフィヤン地区で新たな戦闘が始まり、双方による砲撃やイエメン空軍による爆撃が激しさを増し、犠牲者も増加している。このような戦闘及び無法地帯の拡大は、アル・カーイダ等のテロリストの侵入を招くものとして、サウジアラビアや米国関係者の中で懸念が強まっている。
2. 16日、赤十字国際委員会（ICRC）は声明を発表し、1万人を超す国内避難民が発生していることに懸念を表明すると共に、政府軍及びホーシー派の双方に対し、一般住民が生活出来るエリアの確保と医療措置の拡充を求めた。ICRCによれば、外国人を含む45名のICRCスタッフがイエメン赤新月社のスタッフと共に現地で活動している。
3. 18日、サーレハ大統領はスファイン軍事キャンプを視察し、政府軍関係者に対して、兵士の愛国精神と国家の為の戦いを高く称賛した。又、イエメン政府は18日、閣議でアリア国防相から現状報告を受けると共に、北部地域でのホーシー派武装勢力に対する軍事・治安措置を継続することの重要性を確認した。
4. 18日、ラウジー情報相は、イラン国営アラビア語TVの報道振りに言及し、「ホーシー派は外国の宗教勢力からの財政的・政治的支援を受けている」、「カルビー外相は在イエメンの某国大使と会談し、イエメンの国内問題への干渉継続に警告を発した」と述べ、この件に関するイランの関与を強く暗示した。
5. 18日、サウジアラビア政府筋はAP通信社に対し、①サウジアラビア当局は現状を深く懸念しており、イエメン当局とも緊密な連絡を維持している、②ホーシー派のイランとの関係も懸念している、③更に、アル・カーイダが侵入し、サウジ・イエメン国境地帯を支配することを恐れている、等を述べたが、本問題のセンシティブティに鑑み、軍事面での具体的な協力などの詳細については言及を避けた。